「自分の学びに『自信』をもてる子ども」を育むために～社会科部～

１．目標

「共生社会」の構築に参画できる子ども

～その社会の実現に向けての意欲、道筋を考えられる技、自律性と共存性を発揮していく姿～

４年生で学習するゴミの問題を学習している時。子どもたちは、「リサイクルをしっかりすればいい」「分別を守って、決められた日にゴミを出すことが大切です」ということを発言する。（授業を始める前から“解決方法”を知っていることも多いのかもしれない）確かに、リサイクル、ゴミの分別は、ゴミ問題解決のために欠かせない考え方、行動である。しかし、教室のゴミ箱を見てみると、分別がしっかりできていない。どこかで聞いた“解決法”に基づいたスローガンやキャッチフレーズだけを唱えるのでは無く、自分や周囲の人々の願いとそれに関わる問題の複雑な構造についての確かな社会認識を基に、どのような社会のあり方がよいのかを考える子どもを育てていきたい。

２．自信について

さまざまな背景をもった他者の考えを謙虚に受け止め、自ら学び、「どうなることがよいのか」と一歩を踏み出せる子どもを「自信」のある子どもと考える

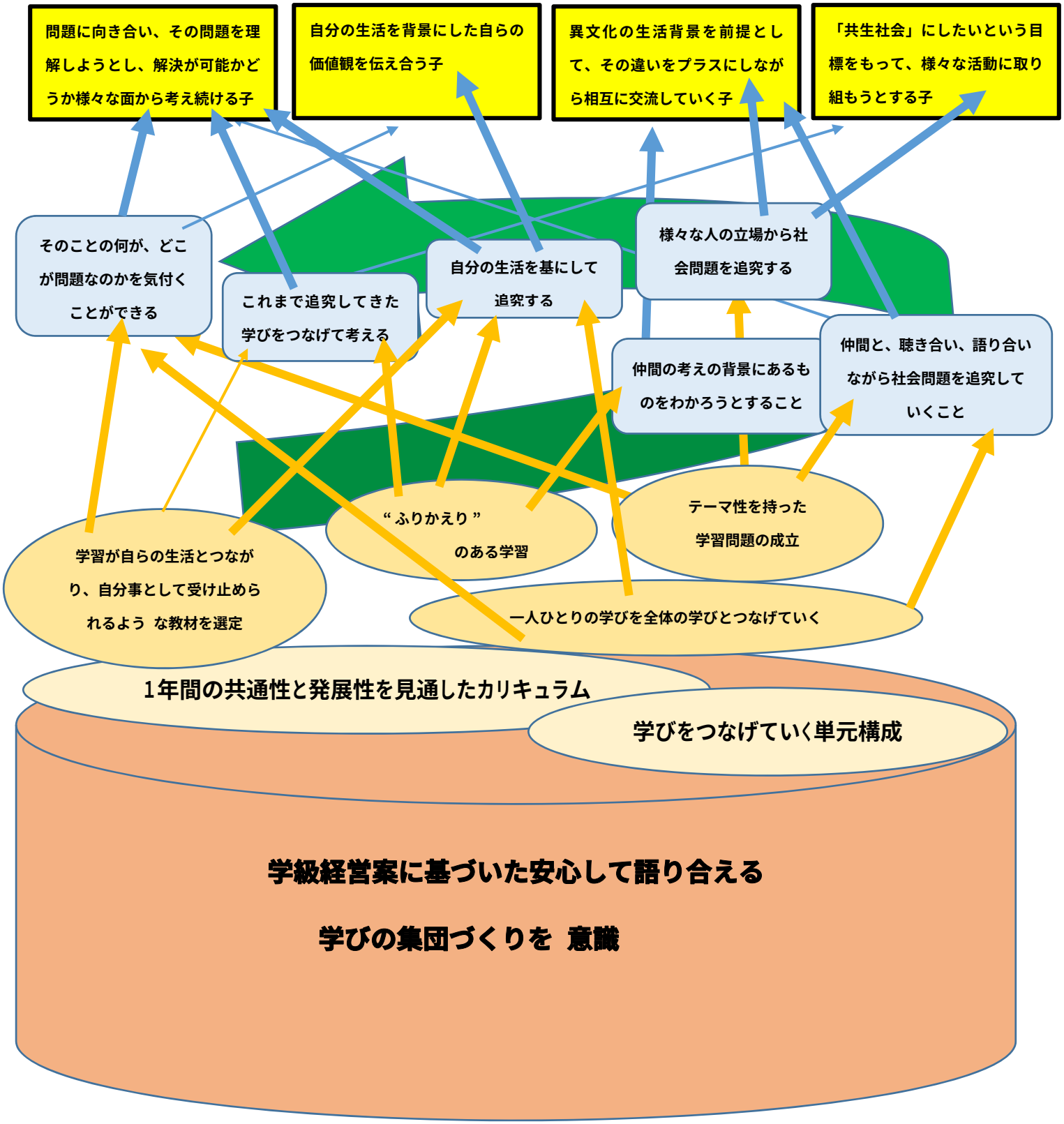
例えば、５年生で、松本サリン事件の報道をめぐってマスメディアから発信される情報にどのように向き合えばいいかを考えた。憶測に基づいた新聞報道を基に、「犯人」を決めつけてしていってしまった。会社の大きな方針の中で新聞記事を書いた記者。「正しい」ことを書いている新聞記事を疑うことが難しい読者である自分。「いろいろな新聞を読む」など解決方法は、ふと頭に浮かぶ。いろいろな手段を使って情報を手に入れたり、比べたりすることは大切なことである。しかし、それだけでは、問題は解決しない。ある子は、「新聞は、“正しいこと”が書いてあることが前提である。そう考えないと、新聞を読めない。どうしたらいいのだろう」と自らに問いかけていた。現代社会においては、経済・環境・国際・人権など複雑な要素が絡み合っている。「どうなること、どうすることがよいことなのか」を決めることが難しいし、解決できない問題も多い。しかし、そこで立ち止まるのではなく、社会問題の複雑な構造について追究し、「どうなることがよいのか」と一歩を踏み出せる子ども「自信」のある子どもと考える。

３．目指す子ども

・問題に向き合い、その問題を理解しようとし、解決が可能かどうか様々な面から考え続ける子
・自分の生活を背景にした自らの価値観を伝え合う子
・異文化の生活背景を前提として、その違いをプラスにしながら相互に交流していく子
・「共生社会」にしたいという目標をもって、様々な活動に取り組もうとする子

４．育てたい力

・そのことの何が、どこが問題なのかを気付くことができる
・様々な人の立場から社会問題を追究する
・自分の生活を基にして追究する（自分の生活を振り返り、見直す）
・これまで追究してきた学びをつなげて考える
・仲間の考えの背景にあるものをわかろうとすること
・仲間と、聴き合い、語り合いながら社会問題を追究していくこと

5. 手立て

・学級経営案に基づいた安心して語り合える学びの集団づくりを　意識
・1年間の共通性と発展性を見通したカリキュラム
・学びを積み重ねていく単元構成
・テーマ性をもった学習問題の成立
・学習が自らの生活とつながり、自分事として受け止められるよう　な教材を選定
・“ ふりかえり ” のある学習→何を、どこで、どのように振り返らせるのか
・一人ひとりの学びを全体の学びとつなげていく